

## 画家金煥基(キム・ファンギ／1913-1974)の伝統表象

— 南北分断後、新国家建設期の韓国における1950年代の制作から —

まつおか とも子 (総合研究大学院大学)

## 発表要旨

13  
時  
30  
分  
—  
14  
時  
10  
分松ヶ崎・東キャンパス内  
60周年記念館  
1F記念ホール

韓国近現代の代表的画家・金煥基(キム・ファンギ／1913-1974)は、1930年代の東京に留学した韓国抽象絵画の先駆者と呼ばれる画家である。1945年の植民地解放後は、1950年代後半をパリで、1960年代前半から亡くなるまでをニューヨークで過ごした。解放直後から美術学部で教鞭をとり国際舞台で活躍する美術家の養成に努めるなど、植民地期世代の知識人層として韓国画壇を牽引した人物である。

金煥基の作品の傾向は、主に二つに分けられる。ひとつは植民地期の自由美術家協会活動期と晩年のニューヨーク活動期に描かれた抽象絵画、もうひとつはその間の1940年代後半から1950年代末、朝鮮陶磁や金剛山といった朝鮮の芸術文化のモチーフを組み合わせて描きたいわゆる伝統表象の絵画である。本発表はこの後者の作品に焦点をあてる。

金煥基の伝統表象については、これまで朝鮮時代の白磁壺を描いた作品群と植民地期の影響のみに議論が集中してきた。先行研究では、金煥基の著述と柳宗悦の朝鮮陶磁観や自由美術家協会の長谷川三郎の前衛美術論との類似性が指摘され、植民地政策下の日本的東洋主義の影響が強調されてきたと言える。

しかしながら、実際に金煥基が朝鮮陶磁を描き始めたのは日本からの帰国後十年以上が経過した1948年以降のことである。しかもこの時期は植民地解放から南北分断、大韓民国政府の樹立と朝鮮戦争という社会の激変期にあるにも関わらず、当時の社会背景と画家の制作との関連が詳細に分析されることはなかった。また個々の伝統表象については、「朝鮮陶磁を描いた時代」という枠組の中で画一的に述べられてきたと言える。そこで、激動の時代である当時の社会背景に即して画家の制作を考察し、伝統表象のモチーフについても陶磁器以外の様々な主題に注目し等しく分析を行うことが必要ではないかというのが本発表の問題意識である。

本発表では、1948年の大韓民国政府樹立以降から、朝鮮戦争を経た1956年の渡仏直前までの金煥基の伝統表象を考察する。解放後、金煥基は文学者たちとの親交を端緒に朝鮮の陶磁器を描き始めた。1950年代に入ると、朝鮮陶磁のほか「石窟庵の印象」(1952年)のように仏像を描いた作品や、蓮の花、鹿などのモチーフが新たに加わり、渡仏期まで描かれた。

こうしたモチーフは、新羅時代や朝鮮時代の文化を称揚することで愛国、軍事強化をはかった国民国家形成期の韓国の社会的背景を下敷きとしつつ、画家が交友した文学作家、金東里(キム・ドンニ／1913-1995)や徐廷柱(ソ・ジョンジュ／1915-2000)ら同世代の文化知識人たちの作品への共鳴の中で生まれたものであった。パリ行きを決意し独自の表現を求めて模索していた金煥基であるが、渡仏直前までの彼の伝統表象はこうした極めて国内的な文脈と問題意識の中から培われたものであったと言える。